

平成は災害の年でもあったが、令和には人智を持って災害に打ち勝つ努力が必要

一昨日は、1000年に一度の大雨で兵庫県加古川地方も水深10mの洪水に襲われると神戸新聞が報じた(一昨日のブログ参照)。そして本日9月1日は防災の日、テーマは地震である。

「地震・雷・火事・親父」は突然に発生するから防ぎようがなく、そのために特に恐れられるのだろう。地震に関する災害情報が本日の神戸新聞で示された(下図は神戸新聞からの引用)。記事の被害想定は国が発表したもので、最悪のシナリオ M9.1 の地震が起こった場合のもので、大きな揺れと津波に関する情報である。

※ 親父は大風(おおやじ)が語源であるといわれる。



地震は何の前触れもなく突然に発生し、そして甚大な被害を与える。そして多くの場合、被災の中心地では生活の基盤が奪われる。大きな地震は平均するとほぼ100年ごとに起こっている。いずれ近いうちに大きな地震に見舞われることは間違いないが、それが今日である

とは誰も思っていないところに災害を大きくする原因がある。地震は避けることはできないが、令和においては「地震が起こったときには」と事態を想定したケーススタディが必要となる。昨今は企業においては事業継続計画（BCP=Business Continuity Plan）が辞意用紙されつつある。個人も企業に見習う時が来た。

